

裏山の民俗

— 身体を拡張するということ・民俗身体論への接近

Folklore of back mountains'

森 繁哉

MORI Shigeya

This view is considered by examples how deep people in a society relate to back mountains' around them.

And I have a main motive how they concern themselves with the back mountains'.

1. 聞き書きの途上で

たとえば、民俗調査などのために村を訪ね、聞き書きをしているとき、不意に思いがけぬ世界が開けてくる瞬間がある。聞き書きの場では、あらかじめ思い描いていた流れに沿って、こちらが話の筋を辿っていくこと正在する。いつしか語り部がその流れから逸れていいくことがある。むしろ、こちらの意図からはずれることは当然であるが、語り部が不意に起こす行動の中に、実はその人が立ち会っている存在の最も深い根っこのような部分が露出し、垣間見える場合がある。

こういう不意打ちが、逆に、隠された現実を堀り出していくのではないか。聞き書きという行為は、語り部の人としての背景や余白を読み取っていく作業のように思われる。表だっては語られることがない、その人の裏の声のような、見えない核心といったものに触れることができたときなどは、一気に、その場が開かれてくる感じさえ受けるのである。

だから、私はなるべく語る人の表情、声のニュアンス、身振りなどの中に、言葉以前の、その人の深層を読み取りながら聞き書きを続けることが多い。言葉だけを聞き、その後を追い、その意味を辿っていくということではない。語り部の全体的な印象から、その人の背景を読み解いていかねばならないのではないか。そういう聞き書きの途中で、語り部がふと見せる意識せざる動作が、とても広大な意味を孕んだものとして現われてくる時には、ほんとうに深い興奮を覚える。そんな場面に、私は何度

か立ち会っている。言葉の裏側とも言えそうな、けつして表には現われ出ないその人の在り方に、私たちはどう向き合ってきたのであろうか。聞き書きという、他者と向き合い、その向き合った人の存在の深みから聞こえてくる言葉に耳を傾けねばならない作業にあっては、言葉の裏に隠されているその人のかたちや気配に、こちらの意識を届かせていくことが特に必要であるように感じてきた。

「裏山」という言葉は、そのようなものとして私の中に飛び込んできた。

山村調査に出かけた折に聞き書きが長引き、昼飯になると、家人に「飯を食つていけ」と勧められる。辞退し切れない場合は遠慮なくいただくことになる。その時、「ちょっと待て」と言って、その家の誰かが（主人や主婦である場合が多いが）外に出ていく。しばらくして戻ってくると、手には瑞々しい野菜や山菜を、季節によっては沢蟹などを携えており、そのまま台所に駆け込んでいくのである。いったい、どこからあんなに新鮮な食物を持ってくるのか、どこに貯蔵されているのか、そのことが不思議でしようがなかった。これは私が調査を行った家にのみ見られた出来事ではなく、山村であればあるほど、そうした光景を当たり前に見かけるのである。

その家には、大きな貯蔵庫などがあるようには見えない。家人の意外な行動はとても不思議であった。そこで、私は家人にどこにその山菜や魚が蓄えられているのか、と聞くことになる。答えはたいてい、「裏山だ」というものであった。その裏という言葉がとても新鮮だったこと

を覚えている。生活という大きな括りでは見えてこない、家の細部に秘められたものを、その時は教えてもらった気になった。そして、外から覗いただけではけつして見えてこない、その家の営みの多様な膨らみや仕掛けが、とても豊かなものとして浮かび上がってくる気がしたし、その人の肉声を聞いたようにも思った。

2. 方法としての裏山

裏山という言葉を、私はこれまでの調査の中で何度か耳にしてはいた。文字通り、裏の山なのであるが、私はこの言葉をもう少し、広がりのある空間として捉えてきた。集落の周縁部に連なる大小の山は、生活空間にきわめて近い山として、野菜の栽培地や草刈り場として、山の恵みをいただく山として、また、山神様などを祀る祭祀空間として機能し、土地の人々にとっては馴染みの深い場所である。近年、里山という語が使われるが、この身近な山は、やはり一定の広さを持ち、たくさんの恵みをもたらす資源存量の多い、深い山そのものを指している。土地の人はそれを裏山と呼んでいると、私は考えていた。

この裏の山を何と呼ぶのか。以下に示すのは、平成12年度に行なった、大蔵村南山地区における調査の結果である。この時は、漠然と、集落の外周部の山々の呼び名を問い合わせてみた。

集落周辺部の山の呼び名	人 数	
裏山	2	単に裏山と呼んでいる
里山	1	里山という呼び名はあまりない
たんに山の字名を当てる	3	一例として「繩路」等という字の名称
以前からの呼び名	7	意味は判らないが、そう呼んでいる。一例「ドンゲ山」
単に山と呼ぶ	2	名称はなく、単にそこの山という意味
持ち主、集落名を当てる	6	「小三郎山」等の持ち主名から単に「南山」の集落名
伝説名を当てる	3	「猫抱山」等の言い伝え名等
土地の一箇所の名を当てる	6	「大スズ山」等の小さな場所の名

これは南山地区の30名に対する聞き取りの結果である。自分の生活圏の範囲内にある利用度の高い山を、人々はその土地に関わりの深い名称で呼び合い、それは集落

内の誰もが知る通称ともなっていた。裏山は生活に身近な山ではあるが、相當に遠くの山までを視野に入れた、一定の空間的広がりを持った場であると、私は考えてきた

が、聞き書きなどで耳にする裏山という言葉は、もっと多様な意味で使われているのではないかと思うようになった。

先ほどの、私に昼御飯を振る舞った家人の場合も、裏山という語を、もっと自分に直接的な、生活の一部のような場所として捉えていた感がある。生活する場と地続きの、自分の家の一部であるような場所として、裏山という言葉を使用しているのである。そこから、次のテーマとして、人々が生活空間において、距離を日常的にどのように認識しているのか、という問題が浮かび上がった。漠然と称されているようでいて、裏山という言葉は実は、もっと幅のある使い方をされていることがわかつてくる。

そこで、山のきわに家があり、したがって、自分の住まいの地続きの裏手に山があり、それを日常生活の中で活用している5軒の家を選んで、この裏山の捉え方を聞いてみた。これもまた、平成12年度に行なった、真室川町及位地区における聞き書き調査である。ここでの5軒の裏山は、すべて持ち山である。

「あなたにとって、裏山という場所はどこですか」という問い合わせたいして、全員が「家のすぐ裏の山である」と答えた。また、その距離に関しては、ほぼ500メートル程度の範囲を指していることがわかった。さらに、いわゆる里山は約2km以上離れている山を指し、裏山とは異なる場所と認識されていることがわかつてきた。

裏山という場所は、生活と一体の場所としての山を指しているのにたいして、その外側に存在する山は別の名称で捉えられている。そして、内部の山と外部の山という大まかな区分の元に、山というものを認識しているのではないか。調査した5名全員が、燃料用の薪を切ったり、萱屋根用の茅を刈ったりする里山と、この裏山とを区別して捉えていたのである。

それでは、この聞き取りを通して浮かび上がった裏山というのはいったい、どのような場所であるのか。新鮮な山菜や川蟹を即座に調達してくる、山村における裏山は、家人にどうのような場所として認識されているのか。それを問いかけることは、村に暮らす人々は自分の生活空間にあって、どのように自然を実感しているのか、また、自然にたいしていかなる知恵や工夫や技を持って対しているのか、といったことを知るためのとても有効な方法ではないかと思う。

3. 裏山調査から

裏山という場所に接近するために、3名の方から聞き取りをすることにした。いずれも山形県最上地方に暮らす方々である。

まず、大蔵村柳淵の三原与一郎さん（73才）である。三原さんは70アールの水田と、2アールの畠を家の敷地内で耕作するほかは、柳淵発電所の作業人夫として働き生計を立てている。家族は奥さんを早く亡くしたために一人暮らしであり、子どもたちも全員独立し、家を離れて生活している。三原さんは自分の持ち山の一角に家を構え、やはり家の裏手を裏山と呼び、この裏山を日常的に利用している。

もう一人は、同じく大蔵村平林の須藤福寿さん（74才）である。須藤さんは120アールの水田に、3アールの畠を耕作している。昭和50年代には養蚕なども手がけたが、現在は息子さんが屋根修理業の従業員として働き、生計を立てている。7人家族である。やはり屋敷のすぐ裏が山であることから、家の裏手を裏山と呼び、日常的に利用している。

もう一人は、新庄市清水の柿崎昭三さん（74才）である。柿崎さんは水田150アール、畠20アールを耕作していた。家族は調査の時点には、農協勤務の息子さん夫婦と、昭三さん夫婦の4人家族であった。昭三さんはこの調査の途中に急死され、奥さんも後を追われたために、現在は息子さん夫婦が後を継いでいる。昭三さんも裏の山を積極的に活用し、家の裏手を裏山と呼んでいた。

この3名の方にたいして、裏山という場所の秘められた姿を浮き彫りにすることをめざして、次のような質問を元にそれぞれに聞き取り調査を行なった。

- ①裏の山を、特別に呼ぶ名称はありますか。
- ②裏の山をどのように利用していますか。
- ③裏の山は家の外の空間ですが、ここでどんな自然に出会っているのですか。
- ④四季の変化を、裏の山ではどのように感じていますか。
- ⑤この裏山は、代々どのように利用されてきたのですか。また、何か必ず守らねばならないことがありますか。
- ⑥裏の山の外に、山と呼んでいる場所はありますか。

⑦おおよそ、どのくらいの範囲を裏山と呼ぶのでしょうか。

⑧ここ数年の、裏山の変化を教えて下さい。

以上のような質問項目に沿って、三人の方々からそれぞれの抱く裏山のイメージを聞き取りした。その結果として、実に多様な裏山の機能が見えてくるとともに、それを生活の細部に巧みに取り込んでいることにも気付かされた。つまり、人と裏山との関係をめぐる民俗誌の一端が、しだいに像を結んでいったのである。そうして、それを知れば知るほど、人々が自然というものを実に深い部分で認識していることが明らかとなっていました。人間と自然との関わりの根源に横たわるものに、さらに思いを寄せねばならないと感じている。

4. 裏山という場所

三人の方に共通する裏山イメージとして、裏山を生活空間の一部に存在する自然と認識していることがあげられる。

- ・裏山という場所は、自分の屋敷の一部であると思っている。
- ・昼時や夕暮れ時、ちょっと入ることが可能な場所を裏の山としている。
- ・自分の手や足が及ぶ、もっとも身近な範囲の山である。
- ・山菜や野菜の鮮度を保つための貯蔵の場所であり、日陰の場所なので重宝している。
- ・いろいろな物（杭や農耕道具）の置き場所でもあるので、山と言っても庭の一部である。
- ・雪を消したりするために、山水用の池を掘っているので便利な場所である。
- ・昔はみんな山に近づいて、家を建てたいと思っていた。薪を拾ったり、焚き付け用の杉葉を拾ったりするためであり、むしろ裏山がない家は不便だった。
- ・それぞれの季節ごとに利用できるので、ここは山としての利用度が高い。

こうした回答から考えると、裏山という場所は、生活のもっとも身近にある自然として認識されていたのではないか、と思われる。人は通常、自然を感じるという時、

その自然が自分にきわめて直接的に作用したり、身体に影響を与えるといったレヴェルにおいて、その自然を意識しているのではないか。日常の範囲でもっとも身近に自然と触れあう場所、もしくは自然に働きかけられる場所が裏山であり、人々にとっては、それは遠くまで大きく広がる自然ではないかも知れないが、やはり自然の一部であると認識していたのではないか。

こうした視点から、裏山を生活領域の自然として捉え直してみると、以下のようなことが見えてくる。

- ・裏山は、自然を学習する現場として機能している。
- ・裏山は、生活が自然との関わりによって成り立つことを、再認識する装置ともなっている。
- ・自然と関わり合う技術や工夫を育む場所として機能している。
- ・四季の変化を刻々と知る場であることから、季節感を実感的に養う場でもある。
- ・人々の生活に裏という現場が存在することによって、その多面的な空間利用から、豊かな自然観を養うことができる。

裏山はいわば、生活領域の内部に取り込まれた内なる自然として認識され、それは外部の大きな自然と結ばれるための通路でもある。しかも、その通路はきわめて変化に富みながら、生活の細部に働きかけてくる柔軟な仕掛けを持った自然として認識されているように思われる。さらに、この裏山が帯びる多様な役割を、いくつかの視点から考察してみたい。

5. 恵みの裏山

裏の山は前述したように、人々にたくさんの恵みをもたらす自然である。遠くの山に出かけなくとも、日常的に自然に触れる事ができるし、そこでは思いがけず多様な自然との交渉が可能なのである。この内に取り込まれた自然は、手を加えれば加えるほど、自然の持つ豊かな顔を生活者の前に見せることになる。人は自然に働きかけ、自然は働きかけに応じて恵みという答えを出してくる。

こういう場所であるがゆえに、人々は裏山を積極的に自分の敷地の一部と見なして関わり続け、また、その裏山は自然に向けて解き放たれた場所であるとも考えてき

たのではないだろうか。これを「中間領域としての自然」と名付けておく。それははたして、どのように人々の日常と関わりを持ったのか。恵みをもたらす山としての視点から聞き取り調査をしてみた。

- ・裏山は季節ごとの山菜、茸を採取する場所である。ゴミ・アザミ・ウルイ、杉カノカ・ナメコなどの実に多種類の山菜や茸が日常的に、かつ恒常に採取できる。それはほぼ一年を通じて採取可能である。
- ・裏山では茸などの原木栽培が可能であり、栽培地としての機能を持っている。オーレンなどの薬草を栽培していた例もあった。花なども栽培する。
- ・裏山の一角のもっとも良い場所に杉の木を植え、焚き付け用の杉の葉などの採取に当てた。
- ・農耕用の用材を確保する場所でもあった。杭・棒・手芝などの調達場所となる。
- ・その場で落ち葉を広い集め、堆肥にする堆肥盤の役目を果していた。
- ・たまにウサギやタヌキがやって来るので、狩りをすることがあった。
- ・裏の山の一角に池を設け、鯉などを飼つたことがある。
- ・栗や柿の木を植え、季節ごとの果物を採取した。

これらが食料や用材を直接に提供する恵みだとすると、裏山という場所がもたらす機能的な特異性ゆえの恵みという側面も大きかった。ここでも、以下のように、裏山は実に多様な顔を持っているのである。

- ・裏の山は採取した山菜や茸、野菜を外の空気に当てながら貯蔵できる場所であった。
- ・山の沢水を引き池にすることで、養魚もできだし、魚の保存も可能になった。また、ワサビなどの水を好む植物の栽培も手がけられた。
- ・池があることで、カンジキなどの民具を水に浸し、加工する技術も磨かれた。
- ・池があることで、山のきわの積雪の多い部分の消雪が可能になり、台所などの利用が快適になった。
- ・農耕用の用材や、茅、草等を保存する場所でもあった。
- ・裏山が広い場合、自家用の畑として利用できたが、家に近いことから非常に便利な畑であった。
- ・裏に山を背負っていることは、風避けにもなった。
- ・雪崩止めにもなり、雪の害を防いだ。

このように裏山は、自然が最大限に人の生活に働きかけてくる恵みの場所でもあったし、人々はこの場所から、

その利を引きだすためにさまざまな工夫もしていた。そういう人が遠くに行くことなく、日常の暮らしの範囲内で、身の丈において自然と向かい合える場所が裏山であった、と言っていいのではないだろうか。

6. 物語の裏山

さらに、裏山は人が自然という存在の奥深さを直接体験する、入り口としての機能も持っていた。裏山にはキツネやタヌキが出没する。その動物たちとの交渉も聞き取りでは多く語られた。裏山は山を背負っている分だけ日陰になりやすく、冷を呼ぶ場所でもある。また、山のきわであることから、山の動物たちもしきりに顔を出し、それはさながら日常の中の異界のような場所でさえあつた。

人々は裏山を、山という異質な空間への入り口として捉え、その消息を知るための格好の場所と考えていたのではないだろうか。この裏山は生活の内部に取り込まれた自然の一部ではあるが、明らかに自分たちの領域とは異なる世界であった。そこは内と外とを仲立ちする世界であって、日常と非日常の境を越えて、何か異なったものに出会う場所でもあった。だから、そこは自分たちの手が及ばない、もっと別な力が働いている場所とも認識されていたのではないだろうか。これを物語の裏山と名付けてみる。

- ・裏山にはよく山の動物がやって来た。タヌキ・ウサギはもちろん、キツネの素早い姿も何度も目にした。
- ・ネズミはしばしばやって来る。このネズミとの戦いが大変で、米を保存する工夫をいろいろ考えねばならなかつた。
- ・イタチもよく出没して、鶏を全滅させられたことがある。
- ・クマが出て来る話をよく聞くが、それは最近のことだと思う。
- ・裏の山にけもの道があるので、壊さないように注意した。
- ・裏山でキツネに憑かれて、深い山に引っ張りこまれたという話を聞いたことがあるが、それからは稻荷様を裏山に祀つた、という。
- ・裏山にはゴミを捨てるな、と代々教えられた。山の神

様が必ず家を覗いて、ゴミのある場合はそのまま帰ってしまうといわれた。

・山に棲むモノは、家屋敷がしっかりといると家に侵入してこない、といわれている。

このように裏山は、自然がさりげなく顔を露出させる場所であり、人々は裏山とはいえ、そこがとても大きな力に支配された場所でもある、と認識していたのではないだろうか。ともあれ、もっとも身近に山という自然を体験する場として、裏山を特別な場所と考えていたことがわかる。こうした裏山の多様な在り方を考えると、裏山という存在は、かつて山を舞台として暮らした私たちの先祖の遠い記憶を、日常の次元において再現していく、精神史的な仕掛けを埋め込まれた場所のようにも思えてくる。

7. 変化の裏山

この裏山はしかし、近年、その姿を急速に変容させつつある。家々の生業や家屋構造の変化もあるだろうし、また、裏山がそなえる多様な機能を用いなくとも、生活が成り立っていく社会の変化もあるだろう。ここでは、この裏山の変化について考えてみたいと思う。

まず最初に、裏山はどのように人々に伝えられてきたのか、そこにはどのような決まり事や禁忌があったのか、といった問い合わせを起点として、裏山の記憶を探ってみた。

・裏山の木は、その土地の山に自生する木がよい、といわれた。

・屋敷は広い方がよいが、それだけではなく、使いやすい方がよいといわれ、屋敷林はできるだけ近くの山に似せろと言われた。

・土地は売っても、裏屋敷は分割するな、と教えられた。

・屋敷の水は飲み水でもあるので、濁すなといわれた。

また、その水は逃がすなともいわれた。

こうしたことが、代々、家々に口承で伝えられてきたことである。裏山という場所において、生活のもつとも基底に横たわる自然が、その家の歴史と繋がりながら保全されてきたことがわかるだろう。その裏山にも急激な変化が寄せてくる。昭和40年代後半から、裏山の様子が一変したという。裏山と関わりながら生活してきた人々は、いま、この裏山についてどのように考えているのか。

裏山の現在を浮き彫りにしてみたい。

・現在は農業経営のスタイルが変わったので、裏山で何かを栽培することもなくなったが、裏山の利用は継続している。

・裏山をきれいにするという感覚は薄れて、物を置く場所になってしまっている。

・裏山に行く必要はなくなりつつあるが、やはりここがあると便利であるから、家を新築しても、この形を変えたいとは思っていない。

・裏山は一軒の家の持ち山であるが、集落の水なども確保しているので、集落全体のものだと思っている。村がなくならないための歯止めの役割も担っているのではないか。

裏山は確かに、時代の大きな流れの中で、その役割を大きく変化させているように思われるが、聞き取りをした3人の方々はみな、裏山を全く放棄しようとは思っていないことが確認できた。いずれの方も、裏山は非常に便利な場所だと答え、じかに身体を伸立ちとして触れ合う空間であると認識していることがわかった。

8. 身体を拡張するということ・民俗の身体へ

この聞き取り調査によって、裏山が帯びている多様な役割が浮かび上がってきた。それは人々に恵みをもたらし、自然の理を教え、家族の絆を養い、さらには、集落の維持機能をも備えていることが明らかとなった。それはたんに裏の山であって、大きな自然というものではないかもしれないが、人々の自然認識に与えた影響ははかり知れないと言つていい。いや、むしろ身近な狭い自然であるがゆえに、密着度が高く、自然を膚で感じとる実践的な学びの場としても、この裏山の存在はとても大きなものであったことが、この聞き取りからは知られるだろう。

私たちは、民俗社会と自然との関係を考えていく時、大きな括りの自然というものを考えがちである。しかし、この裏山のような、人々が日常的に手を入れ、じかに身体をもって関わり合う小さな自然について、しっかりと把握しておく必要があるのではないだろうか。そこには、大きな自然に向かうときの、勇ましさや格好のよさは希薄かもしれないが、人間がみずから知恵を尽くして、目

の前に横たわる自然という対象に立ち向かっていく時の、微妙な、ひそかな身の構えがとても濃密に詰まっている感じがする。

そして、この裏山という名の、小さく身近な自然を伸立ちとして見えてくる人と自然との関係の在り方は、人間たちが連綿と時代の中で繋いできた、真に本質的な自然認識のひとつの在り方を示唆しているように思われる。

もうひとつ、この裏山の存在は、私たちにとても大切なことを気付かせてくれる。

それは裏山の範囲について、誰もが自分の身体をフル回転できる範囲と定めていることである。聞き取りでは、おおむね500メートル程度の範囲という答えが得られたが、これは人間が自分の身体を少し拡張して、なお責任をもって関わることが可能な範囲と考えられる。

自分の身体を少し拡張するという表現には、いくらかの説明が必要だろう。それはつまり、手で触れたり、眼で確認したりといった、身の感覚をもって自然というものを実際に認知できる身体活動の幅を、やわらかく広げることを意味している。人間にはある場所に、小さな宇宙を形成することができる身体の能力が備わっているが、裏山はいわば、生活者がこの身体能力をかぎりなく豊かに発揮できる、とても合理的な場所だったのではないかと思われる。

人はある場所に立たされた時、その場所の性格を知りたいと思うだろう。それは、その場所に身体を馴染ませようと試みる、身体自身の要求とも言えるものである。そして、身体は自分の位置を安定させるために、さまざまな企てを試みる。そこに在り続けるための条件を整えようとして道具を考案したり、場そのものを造り直したり、変化を与えてながら、次第に自身と土地との距離を縮めていくこうとする。

それは自分の身体に沿うかたちで、その場それ自体の拡張を惹き起こそうとする、それゆえに身体の拡張でもある。身体はこうして場に働きかけ、場を活性化させようとして試行錯誤をくりかえす。裏山はそのように身をもって転がされていく、まさに人の身体運動の現場であったと言つていい。

また、その時、現場が裏の山であるということは、もうひとつの意味合いを帯びてくる。裏は通常、人には見せない場所である。見せないがゆえに、非常に私的な色合いが強くなる場所となるだろう。家という仕掛けは、そ

の外向きの顔を表の光の当たる場所に委ね、家人としての内の顔を裏の影の部分に預けようとする。裏はもつとも自分らしいが、通常は見せられないその家の私性が剥き出になる場所なのである。だから、裏山は家の表に従属する空間ではなく、家が自分を際だたせるもうひとつの空間なのである。表は裏があることで、裏は表があることで、ひとつの全体として成り立つことが可能となる相互性の場所なのである。

私は見えない場所（暗部）に光を当て、それを表に引き出そうとしているのではない。裏は裏として機能しているがゆえに、その場所は多層的な膨らみをもって人を活かしていくのである。この聞き取り調査で目指したもののは、たんに裏山の復権といったものではない。人々の生活の根底に隠されてある、身体という存在に気付き、発見すること、そこから身体の幅を広げていく可能性を問い合わせることである。裏山をめぐる思索をひとつの起点として、身体の可能性について考える試みを続けたいと思う。

9. 追記として

この聞き書き調査は、東北芸術工科大学より助成を受けた特別研究「山と人の民俗誌」がきっかけで始められた、私の山村研究のひと齣である。平成11年度から2年間にわたり、主に山形県最上地方をフィールドとして行なわれた。聞き書きにお付き合いくださった方々は、70名近くに及んでいる。

この論考では、そのほんの一端を紹介するに留まっている。こちらの力不足は明らかであり、せっかく語っていただいた方々の貴重な体験にたいして、深く思考を届かせることができなかつたのではないか、とこころ穏やかではない。聞き書きという行為は、語り手の大切な時間を消費する、見えない犠牲の上に成り立っているものだ。時間をどのように共有することができたか、それは語られた具体的なるものにどこまで接近できるかにかかっている。そして、語り手の方々は、その人生を費やし練り上げてきた身体の断面を、私に見せてくれていると感じている。

今回はそんな視点から、いかに民俗の身体へとアプローチするか、というモチーフを持って「裏山」をテー

マとしてみた。私は日常の中で見聞きする人々の行為の根に、身体というものの確かな存在を感じてきたし、一個の身体がむしろ現象として押し出されていく様から、さまざまな民俗事象を眺めてみたいと思っている。このささやかな論考は、そうした私の思いを託した印象の記録とでも言うべきものである。

そして、これは裏山の研究としても、いまだ中途半端なものに留まる。たとえば、この作業は現在も継続して続けられており、きわめて生な事象の提示になっていること、聞き取りの対象が、山に隣接して屋敷を形作っている方々の事例に限られていること、また、裏山と関わって暮らす人々の生活実態に触れることができず、裏山をどう捉えているかとテーマに終始したことなど、反省する点は多い。あくまで中間報告的な意味合いの論考であることを断わっておきたい。

今後は、山のきわから離れた人々の裏山観を聞き取りすること、聞き取りをした多くの基本データ（——たとえば裏山に植えられた木の種類、採れる山菜の種類と、それをどう利用したか、など）を整理すること、屋敷という概念を拡大し、屋敷林と裏山の関係を考えてみると、裏山の保全と継続的な活用はどうしたら可能なのかを考えること、といったテーマを想定している。それらのテーマに関しても、やはり民俗の身体へのアプローチと重ねながら、考えていきたいと思っている。

なお、新庄市清水の柿崎昭三さんは、この聞き取り調査の途中で急死されました。慎んでご冥福をお祈り申しあげます。